

横浜伸銅

アルミ・銅加工を強化

板・棒加工機を増設

権田金属工業グループの非鉄金属流通である横浜伸銅（本社・神奈川県横浜市都筑区、社長・権田源太郎氏）は、銅やアルミなどの板製品やアルミ型材・棒製品の加工能力を強化した。投資総額は合計約2千万円。試作案件などの新規需要分野稼働を始めている。横浜伸銅は伸銅品や

力しており、京浜地区を中心に素材から加工品まで幅広くワンストップで提供できる体制を整えている。昨年1月には手狭となった本社を神奈川区から都筑区の港北インターチェンジ近隣に拡張移転。既存設備に加えて薄板用シャーリングと丸棒用チップソーを新設し、加工機能の充実化を図っている。新設した薄板加工設備はアマダ製のシャーリングで、投資額は約1千万円。板厚3ミリの銅とアルミ、ステンレス薄板に対応したもので既存の老朽設備から更新した。新設備の導入により加工精度の向上に加え、省力化や半自動化が実現。また板幅1千までだった加工範囲が2千までと大きく拡大。顧客ニーズが多様化する中、設備の対応レンジを引き上げることが必要だと判断した。これまで1千ミリ以上のものは外注していたが、内製化できることになる」（権田源太郎社長）と説明する。

棒材加工能力も引き上げる。山本機械産業製のアルミ丸棒用チップソーを増設した。直径150ミリの製品に対応できるもので、投資額は約1千万円。横浜伸銅ではすでに2基のチップソーを保有しているが、銅製品の加工との併用では稼働率が低下し、一定量を外注する必要があった。今回、アルミ専用機を導入することで効

率が高まるとともに、加工速度の速いチップソーを導入することで加工量も大きく増加できるとみている。今回の一連の新設備導入に当たっては国のものづくり補助金を活用し2分の1の補助を受けた。設備はいずれも設置を終え、本格的な設備稼働に入った。権田社長は「本社移転により設備スペースに余地が出て設備投資を實行できた。加工の品質を高め、顧客対応力を強化する。半導体や液晶製造装置関係の加工仕事なども狙っていた」としている。

